

「開会の挨拶」 発起人代表 水谷宏

本日は、何かとお忙しい中を、本会の設立のためにお集まり頂きまして、厚く御礼申し上げます。発起人を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本会を設立しようと準備を始めたのは、昨年の夏ごろにさかのぼりますので、詳しくは、第二部の設立総会の資料にまとめてございますので、後ほどご説明申し上げます。新春早々に、日本ケルト学会の名簿を中心に、関係あると思われる52名の方々に、ご案内を郵送させて頂きました。

葉書のご回答をおまちいたしておりましたが、本日現在、先ほど受付でお配りいたしました「会員名簿」に掲載されております30名の方々が入会して下さいました。ただ、大学関係の方々は、この時期、入試等々の公務と重なったために、ご欠席が多く、本日、出席のご回答を頂いた方々は、最終的には約半数の15名になっております。一言、ご報告させていただきます。

さて、私が「カムライグ学」と呼んでいる研究分野は、現地語で“*Astudiaethau Cymraeg*”と呼ばれている研究分野のことです。より一般的な日本語の使い方では、「ウェールズ学」という呼称がもっとも適しているように思われます。この学問領域は、より広い観点に立てば、「ケルト学、ないしはケルト研究の一環としてのカムライグ学」と規定することができます。歴史的に見た場合に、「ケルト民族やその文化の研究」ということになれば、英語で「ウェールズ」と現在呼ばれている地域だけに限定されるのではなく、ほぼヨーロッパ全域にわたる地域が対象になります。「英国」ちう地域よりは、むしろ、フランスやドイツ、さらにはイタリアといった地域との関連が深いように思われます。

しかしながら、より限定された視点に立てば、「英国研究の一環としてのカムライグ学」との規定にも、それなりの妥当性がございませぬ。地域社会的、文化的、また人種的にも「カムリ」と呼ばれている地域は、「英国」と呼ばれている地域の歴史や社会と緊密な関係を、1500年以上にわたって維持してきたのであります。特に、16世紀以降のイングランドとの相互関係は、極めて密接であったという歴史的事実を見逃すわけには参りませぬ。その意味からすれば、「ケルト学の一環」というよりも、むしろ、「英国研究の一環」としての位置づけの方がむしろ現実的ではないか、と私は強く認識しております。

一方、日本の絵国研究 *Astudiaethau Prydeinig* / *British Studies* そのものは、極めて不完全であったと言わざるを得ませぬ。明治以降の日本における「英国研究」の歴史は、残念ながら、「イングランド研究」*English Studies* が中心であり、「カムライグ学」*Astudiaethau Cymraeg* は、まったく断言しても過言にならない程、見過ごされて参りました。「カムリ」*Cymru* という国は、「ウェールズ」*Wales* と呼ばれ、まるで、イングランドの一部であるかのごとく認識され、今日に至っているのであります。‘*Wales*’ という英語の単語は、‘*foreigner*’ 「外人」を意味する古英語の ‘*Wealas*’ に、その語源を辿るとするのが定説になっております。当時のブリテン島の社会状況からすれば、サクソン人から見れば「外人」と呼ばれる人々には、自らを「カムロ」と呼ぶ「カムリの国の人々」以外に、「ローマ人」も含まれていたのは歴史的な事実であります。それにもかかわらず、われわれ日本人の認識では、21世紀になってしまった今日でも、未だに英語からの借用語である「ウェールズ」「ウェールズ人」という語を使って、「カムリの国」や「カムロ」の人々に言及しているのであります。学問研究が、正しい認識の上で行うものであるならば、本会が推進しようとする学問は、「英国研究の一環としてのカムライグ学 *Astudiaethau Cymraeg fel*

rhan o Astudiaethau Prydeinig であると、私は認識しております。日本の「英国研究」は、「イングランド研究」だけでは不十分であり、「カムライグ学」なくしては、完成は致しません。

本日、設立を願って私たちがここに集まった意義は、非常に大きいものと確信します。日本の「英国研究」を、本来あるべき姿にすることが、私たちが「カムライグ学」を専門にする学会を、設立するもっとも重要な理由の一つであると信じます。

アイルランドやスコットランドに関する研究をなさっている日本での学会は、既に、何十年かの歴史があり、現在も活発に研究例会等々を開催されておられますが、「カムライグ学」Astudiaethau Cymraeg の学会は、20 世紀においては、組織化はなされませんでした。しかし、先ほどご報告申し上げました通り、30 名の方々が入会して下さり、この学会を組織化して頂けるメンバーが揃ったこととなります。

本会が、本日をその船出の第一歩として、皆様方のお力添えによりまして、大きく羽ばたくことができまよう祈念して私の開会のご挨拶とさせていただきます。ご清聴、大変ありがとうございました。